

---

# World Revolution!

澄江春樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

World Revolution!

### 【Nコード】

N9177Z

### 【作者名】

澄江春樹

### 【あらすじ】

「世界革命」というモンスターが世界各地に住みつく事件が起きて、約十年。ぐーたらゲーマー主人公・天江一稀は岩崎奏という女子と会って、その真実に少しずつ近づいていく。——という物語を創っていきたいです。文章が見苦しいものになるかと思いますが、日々とどこどころ直していこうと思っています。なので一回見た次の日には多少の変化が見られたりします。

## プロローグ（前書き）

初めまして澄江です。

初投稿なので見苦しい文章ですが、よろしくお願いします。

## ブローグ

世界は変わった。

悪い意味ではない。いい意味でだ。

都市部には最新式の高層ビルが建ち並び、最新技術を使った電光板などがいくつもある。都市部でなくとも明らかな科学の進歩のしるしがあり、それは見ている者の目に華々しい印象を与えた。といっても進歩が急激すぎて一般家庭には普及してないのが現状なのが。

科学が急激な進歩を遂げたとき、確かに何かが起こったのは事実だ。ただその原因が分からない。その疑問を学者、研究者がこぞ調べて調べたのだが、結局核心にたどり着くことはできなかった。

世界革命。あやふやなそれは誰が言い出したのかも分からないが、いつの間にかそんな名前になっていた。

だが、科学の発展は同時に災厄を世界にもたらした。

人間を食い散らかす化け物、俗に言うモンスターが人の住まない地域、通称「ゾーン」に徘徊するようになったのだ。

一体どこから湧いてでてくるのか。どうしてモンスターが湧くのか。それらの疑問一つ、まだ人類は分かっている。人類にとって運がよかったのはモンスター達が生息地を持っていたことだ。おかげで人間は絶滅せずにすみ、住む場所を追われてなお生き残った人

間が作った一大都市、それがここ、遙坂市だ。

日に日に進む科学技術の進歩は軍事力にも影響して、やがて撃退とまではいかないが、国民の安全を守るまでに治安は回復された。今では居住区にモンスターが進入するのを阻止するまでだ。それでも突然変異を起こした「変異種」が包囲網を破り、街中に進入するという事件や今までなりを潜めていたモンスターが進入する事件が今でも多々ある。後者は特に厄介で、犠牲の数が大きい。

今説明したように、世界は変わった――。

これは紛れもない事実だ。  
世間は今でもそう言っている。

俺――天江一稀も世界の移り変わりをいいことだと割り切つて特に気にせず生きていた。

だが、ある人物によってその生活は180度変わることとなった。

俺の人生は――

――岩崎奏との出会いによって一変した。

## Episode 1

「ふー、ねむ．．．．．」

時計を見る。針が指している時間はまだ学校に行くにはほど遠い時間だ。

「よし、もう一度だ．．．．．おやすみ．．．．．」  
ベッドに潜り込み、寝息を立て始める。昨夜、夜通しでゲームをしていたのだ。さすがに眠い。

眠りに体を任せて数分、ドタドタと階段を駆け上ってくる音が聞こえる。

「こらーっ！ 天江家の朝は早いんだから起きて。兄さん」

我が家の妹、夏穂の高い声が耳に聞こえてきた。

「そんなきたいこと言うなよ。頼むから兄にあと五分だけでいいから寝させてくれ」

「ほんとに兄さんはダメなんだから。——もう、一人で起きてよね、兄さん」

別に一人で起きれないわけではない。横に転がっている目覚まし時計をかけていないだけだ。それに——

「知ってるか？ 世間では妹に起こされるなんて貴重なシチュエーションらしいぞ？」

「確かにそうかもね。．．．．．バカ言ってる暇があったら着替えて朝ご飯早く食べちゃってよ」

だがそんな俺の言葉をバカと言って夏穂はまた下へと降りていった。

「バカはないだろ、ったく」

頭をかきながら寝間着から制服に着替え、妹に言われた通りに下へ下りる。

少しロングな髪。さっきは仏頂面を浮かべてはいたけど、素では整った顔。淡い膨らみをもった二つの双丘。それでいてモデルにでもなれそうなほど整った体型。きつとあのしつかり者は男子にさぞかし人気なのだろう。

——兄に対する仏頂面さえなければ俺も可愛いと思うんだけどなあ。

「はよー」

ドアを開け、見えてきたのは夏穂のソファーに座りながらテレビを見ている姿、そしてテーブルの上に見える美味しそうな朝食。

こういった光景にはなにか感慨深いものを覚える。

「あれ．．．．．？ 母さんが消えた」

朝、いつもキッチンに立っている母さんの姿が見えない。どうしたのだろう。

空を切った挨拶の代わりに夏穂はソファーにあごを乗せて俺に呆れたように言った。

「一昨日から母さんは旅行でしょ？ ていうか昨日も同じこと言っただけど」

「ああー、そういえば」

俺たちの母は今回のように度々旅行に行く。

家を出る前日、リビングの隅に荷物があると思ったら翌日には、

『ちよつと母さん遠いところに用事があるから家空けるね！ 行つてきまーす！』

と書かれた書き置きを残して消えている。消えたら最後、一ヶ月

以上帰ってこない母さんは今も旅に出る理由を教えてください。

「いつも思うんだけどなんで旅行に行くんだろうね？ どこへ行くかも教えてください」

兄さんもそのことを考えているんだ、妹よ。

「さあなあ。案外父さんにも会いに行ってるんじゃないの？」

父は元々海外に単身赴任をしている身なのでほとんど家に帰ってこない。

「それじゃ教えない理由になってないでしょ。——って早くご飯食べちゃってよね」

「はいはい」

そこからのんびりと朝食を食べた俺は支度を整えて妹より一足早く家を出て、俺と夏穂の通う朝椿高校に向かった。

「よつす、一稀！」

いつも学生で賑わっている朝の日差しが眩しい大きな通りを歩いていると、後ろから見知った人物の声がかかってきた。

「あー。朝からお前は元気だな」

顔を横に向けて横目でそいつを見る。相変わらず顔立ちは整っていて、眼鏡と黒色をメインにしている学園の制服は、その細身の身体によく似合っている。

「そういうお前は逆に眠たそうだな」

呆れたように笑っている顔は妙に憎たらしく思える。

「しょうがないだろ………昨夜は夜通しでずっとゲームしてたんだから」

山場に入ってしまったからつい熱中してしまった。

「ふーん。——ってえことは一稀、お前今日提出の筆記課題

忘れてるだろ？」

「・・・・・・・・・・え？ 課題がある？」

おいおい・・・・・・・・・・嘘だろ・・・・・・・・・・

「なら一ついいことを教えてあげようじゃないか。——今日  
の課題提出先は、あの『醤油』だ」

その言葉を聞いた瞬間、俺の顔は真っ青になった。

本名、阿野勇作。校内でのあだ名は「醤油」。一見あだ名を聞いた  
ただけだと恐怖などまるで感じない、むしろ可愛いと思うのだが現  
実は逆だ。課題を忘れたらノイローゼになるほど怒る恐怖の塊だ。  
そのお茶目な名前の由来は、いつも弁当に醤油を入れてくるからら  
しい。

身体からは冷や汗が滝のように流れ出ている。脱水症状が起きて  
しまいそうだ。

「・・・・・・・・・・及川。いや、及川遙斗様。俺からの一生に一度の  
お願いだ。課題を見せてくれ」

「俺はその一生の一度の願いを通算17回聞き入れてるんだけど  
な・・・・・・・・・・」

今回もかよ、と言いたそうな口調だが、それとは裏腹に表情には  
微笑が浮かんでいる。

「ま、いいけど。その代わりちよつと放課後付き合ってくんない  
？」

しょうゆ提出の課題を忘れて地獄を見るか、放課後友人の用事に  
付き合うか。そんなの天秤に掛けるまでもない。

王から命令を受けた従者のように身体を下に落とし、片足を立て  
て俺は即答した。

「喜んでお供しましょう」

## Episode 1 (後書き)

感想を頂ければ嬉しいです

## Episode 2

窓から日光が差し、いつも以上に暑い教室。

その教室の隅、黙々と課題を写している生徒が一人。

「ぐおお、お、終わらねー……………」

周りのクラメイトが疑うような視線を送ってくるが、今の俺にはそんな関係ない。

俺はひたすら課題とにらめっこしあっていた……………。

無事提出して、難を逃れた俺は24時間耐久で日差しを受け続けていたゾンビばりにうなだれていた。

「くそう、まさか課題の量がここまで多いとは……………」  
課題を出した鬼教師を心の底から呪っていると、見知った人物から声がかかってきた。

「あんたが家で課題をしてこないからいけないのよ」  
少し呆れているような高い声。その声がした方向に俺は目をやった。

「おお……………楓か」

そう返した俺を、からかい口調でさらに責め立てる。

「あはは、どうせゲームでもやってたんじゃない？ どう？  
星でしょ？」  
図

「ぐ……………ああ、そうさ、そうだよ」

当てられたことに少し悔しかったが、渋々うなずく。

「そんなことじゃ今日の授業どうすんのよ。保健室いった方がいいんじゃないの？」

「心配ない。授業は受けるさ」

「あつそ。ま、倒れても知らないけどね」

そういつて楓は自分の席に荷物を置いた。ちなみにその席とは俺の隣だ。

「それよりお前だつて最近貧血気味とか言つてんだから、自分の心配しとけよ」

俺はからかうように言つてやった。

「なつ．．．うるさいわよ」

そう言つた楓の顔には少し赤みがかつていた。

少し黒色のかかつた金髪のポニーテール。それなりに整つた品性のある顔。体型は他の女子と同じように若干細いくらい。なにより印象づけるのは幾何学模様の刻まれた両腕のバンド。

そんな女子、岩倉楓は男子の人気ランキング五指の中に入る猛者だ。告白された数は数知れず。このクラスにも勇気を出して告白したが、あつけなく散つていったやつが五人程いたはずだ。

「そうでもないぞ。それでも付き合いが長いんだ。多少は心配――」

「あ、そうだ、今日の放課後空いてる？」

「．．．．．おい。どうしてそうなる」

「いいじゃない、別に。理由は特にないわ」

「んーと今日は．．．．．」

――そういえば今日は遥斗の用事に付き合つたかな。

一応地獄を見るはずだったのだから断るわけにもいかない。

「今日はダメだな」

「え？ 珍しいわね。万年ゲーム廃人or暇人のあんたが？」

「悪い、今日の放課後は遥斗の用事に付き合つんだ」

「ふーん。ならそれ、私も付き合つていい？」

「それは遥斗に聞いてくれ」

どこに行くかはあいつしか知らないからな。それにこれでもし行く場所が『エロゲーショップ』とかだったらシャレにならない。

「じゃあ、ほら、あんたも1限目の準備しないと」

その言葉を聞いて俺は周囲を見渡した。確かに大勢のクラスメイトが次の授業に向けて準備している。

「じゃ、放課後の話、後でね」

「ああ」

放課後。

クラスの違う遥斗に合流して、楓も、ということを経たところOKをもらえたので、学校から未だ名前も知らない目的地に直行している。

煌びやかな居住区を抜けて、いかにもモンスターが横から飛び出してきそうな荒れ地を歩いているところで楓から声があった。

「ねえ、結局行くとこってどこなの？ 及川」

「ふっふっふ、聞いて驚くなよ。目的地とは『ゾーン』だ！」

それを聞いた途端、楓、俺と顔が歪む。

「おい……正気か？」

俺はこのご時世当たり前の質問をぶつける。楓も同じ意見らしく、なに考えてんのよ」とうなっている。

だが、俺の問いに遥斗は、即答だった。

「あつたりまえよ」

「おいおい．．．．．用事に付き合っ、じゃすまないっての  
実際問題、ゾーンには学生では太刀打ちできないモンスターがご  
ろごろいる。」

「んなこというなって。好奇心だよ、好奇心」

そういう遥斗の手にはいつの間にかカメラが握られている。

「楓、どうする？」

そこで俺は楓に行くかどうかを決めてもらうことにする。

「んー、私も少しは興味はあるけど．．．．．どうしようかな」

「岩倉、ちよっと．．．．．」

遥斗が楓を手招きするように呼び、俺には聞こえない音量で楓に  
耳打ちする。

瞬間、楓の目が金マークになった。

「一稀、ゾーンに行くわよ！」

「え？　おい、急にどうしたんだよ」

「そんなこといいじゃない。さあ、行くわよ！」

その後ろでは遥斗がすすり泣いたような声を出している。

「少し痛い出費だが．．．．．これもやむをえん！」

「お前あいつに何したんだよ」

少し疑う表情を浮かべた俺は肘で遥斗の肩をこづく。

そんな俺を無視したかのように、わざとらしく口笛を吹きな  
がら遥斗は歩きだした。

あっけになった俺の隣では楓が何やらつぶやいている。

「．．．．．駅前ケーキ食べ放題．．．．．ああ．．．．．」

「．．」

「．．．．．楓．．．買収されてたのか．．．．．」

ゾーンにつながる道は無限大にある。ただ、ゾーン手前にある柵を越えればいいだけなのだ。

だが、政府の見回りが来るのでタイミングを見計らわなければならない。噂によると、見回りに捕まるとひどい拷問を受ける、洗脳される、などとても恐ろしいので、捕まったら最期と思っている。

やっとその入り口まで来た俺は昼でも不気味なそれに思わず声をあげていた。

「ここがか．．．．．」

柵の少し手前には気味の悪いドクロマークがついた看板があり、ここには化物たちが常に跋扈してるといわれたら思わず納得してしまいそうな、薄暗い印象を放つ森だった。

辺りはすっかり人氣がなくなっている。まだ昼だからいいが、夜になるとさぞかし気味が悪いだろう。

「静かに．．．．．見回り、いないか分かるか？」

噂のことを知っているのだろうか。妙に真剣な遥斗が耳を澄ませてこちらにも聞いてくる。

俺もそれにならない、耳を澄ませる。

「．．．．．いないみたいだな」

「そうみたいね」

楓が俺の言葉に相づちを打つ。

「じゃ．．．．．行くぞ」

飛び出して柵まで駆け抜ける遥斗を追って、俺たちも走った。

木々が生い茂る森の中を歩いて随分と時間がたっていた。

薄暗い印象は奥に進むにつれて濃くなつてきている。

「なあ……どこまで歩くんだ？」

さすがにこれが後何十分も続くのはきつい。

「今歩いてるのは、初見じゃ分からないだろうが実は道なんだ。ほら、足下見てみな。人の足跡があるだろ？」

「んー？……確かに」

と頷くのは楓。みたところ、少しバテているようにも見える。

「この道は円形状になっててな、要はゾーンを観光するために作られた道なんだよ」

「ふーん。てことは、この道は安全なのよね？」

「まあ基本的にモンスターは襲ってこないさ。……多分だけ」

「た、多分って何よ！……はあ、やっぱりついてこなきゃよかったかも……」

「岩倉は度胸がないなー。一稀、いざって時はお前が守ってやれよー」

「俺に話を振るなよ……」

「万が一の時はがんばってよ！ じゃないと課題見せてやんないんだから！」

「な、なにい！」

おまえは鬼か！ だが俺にはまだ生命線である便利屋が――

「よし！ 俺も岩倉に一票！」

「便利屋、お前まで！」

「便利屋じゃねえよ！」

雑談しながら歩いていると森にぽっかりと穴が空いたような広い空間に出た。その四方にはそれぞれ銅像が置かれている。一つは人間。もう一つはモンスターと分かるのだが後二つが分からない。

「ここは．．．．．?」

俺の疑問に遥斗はメガネをクイ、と持ち上げ、自慢げに説明を始めた。

「うおっほん。ここはなんと、あの『血塗られた戦争跡』だ！二人も教科書でなら見たことがありそうだけど．．．．．生で見るのは初めてなのでは!」

急にアナウンサー口調になった便利屋を放置し、俺と楓は同時に感嘆の声をあげた。

「へえ、ここが．．．」

「ここがか．．．．．。というかなんでお前はそんなに詳しいんだ?」

以前から何かと雑学やら知らない知識を披露していたのだが、こういうことまで詳しいとは。

「俺は以前にもその道の人と来たことがあるからね。当然ここら辺は知り尽くしてるってこったよ」

「相変わらずお前の交友関係は幅広いな」

こいつの交友関係は得体が知れない。どこで知り合っのか是非聞いてみたいところだ。

「ふふふ．．．．．このためにカメラを持ってきたってもんよ！ いざっ!」

カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ．．．

隣でカメラのシャッター音が無数に聞こえる。

こんな薄気味悪いところを撮りたいなんて変な趣味だなあいつも。

「わ、私も、ちよつと向こうの銅像見てくるわね」

「おい、気をつけろよ」

カメラに夢中の遥斗の代わりに俺が忠告しておく。

「危なくなったらあんたが助けにくるんだからねー!」

んなものの保障できないってのに。

楓は元々興味があつたのか、早足で銅像の方に向かっていった。

・・・ふう、一人になった、か。特別やることもないし、あの銅像にさほど興味があるわけでもない。あの二人が飽きるまで、俺はリラックスさせてもらおうとしよう。

日当たりがいい場所を選んで寝そべる。目を開けると少し曇りがかっている太陽の日が沈んでいくのが見える。鼻に意識を向ければ、森独特の匂いが鼻腔をくすぐり、耳を澄ませば辺りで聞こえてくるのは、今も楽しそうな顔であっちこっちの銅像を行き来している楓と、カメラを持ってかけずり回っている遥斗の足音が二つ。

——二つ？

途端に俺の顔が陰しくなる。

こちらで聞こえる二人の足音、それに混じって遠くから静かに響いてくる足音がある。

一、二、三個。

とても小さい音だ。偶然といえどリラックスしていた俺と違って、興奮しているあいつらには分からないだろう。そして今もお、少しずつだがこっちに近づいてきている。

これは十中八九モンスターだ。

そうなると少しヤバイ。あいつらは無防備だから遭遇したら確実に殺されてしまう。

——まあ、俺は倒せるんだけどね。

あいつらには日頃から色々助けてもらっている。今回はその恩を返すチャンスなんじゃないか。

だが、諸事情でこいつらの前でやるわけにはいかない。でことで今から俺の方が出向いてやることにしよう。

「やい、遥斗」

「ハア、ハア、なんだい、一稀！」

ちょ、気持ちわるっ！ 興奮するにも程があるだろ！

せっかく腹くくったのにお前の性で台無しだよ！

「…………俺の膀胱が破裂寸前だからさー、ちょっと向こうの茂みで済ませてくるわ」

その返事を聞かず俺はモンスターがいると思われる茂みに足を向けた。

今にも姿を現しそうな足音に身体を緊張させながら、気配を殺す。

まあ、戻ってきて違和感がない程度に頑張っとくか。



## Episode 3

あの二人に気づかれずに敵を倒すにはどうすればいいのだろうか。

無論、一発で倒すのが一番だ。

それは分かっていたはずなのに．．．．．やっちゃった。

走ってモンスターのいるところまでいったのはよかったんだけど、  
どうやら見つかってしまったらしい。

足音は極力出さなかったけど、そのモンスターが犬科だったことが運のツキだった。

目前にいるのは三体の猟犬。赤い体毛を持ち、飢えた獣のように鋭い目をこちらに向けてくる。

「バウッ！ バウッ！ バウッ！」

俺を囲むようにして威嚇してくる。

一触即発の空気。

先に破ったのは猟犬の方だった。

「ガウッ！」

横にいた猟犬が土を蹴り、首元に噛みつきこうとしてくる。俺は咄  
嗟に首を横に曲げた。

チッ！

うおっ、危ない！ 首元を掠め、そこから血が流れる。

また膠着状態にはいる。

俺もそろそろ反撃しなければまずい。

風の音がやけに大きく聞こえる。

俺は膠着状態のうちに右手に力を込めた。

右手にどんだん力が溜められていく。

あと、わずか数秒で発動する――

はずだったが、そこで膠着状態が無念にもとけてしまった。

タイミングを計ったように猟犬どもが三体同時に襲ってくる。

――だが、俺の準備もその瞬間整った。

俺の右手から炎が生まれる。

瞬時にして右手から身体全体へと広がっていった炎はバリアーのように俺の身体を包み、猟犬から身を守った。

炎に身体を突っ込んだ猟犬どもは驚いた声をあげるも一旦距離をとり、警戒態勢に入る。どうやら知能は高いようだ。

さっき俺の首を噛もうとした猟犬が頭を狙って飛び込んでくる。身の程知らずにも程があるぞ。

紅蓮に包まれた右手を一振りするだけで、その姿はあっけなく灰となる。

「キャ、キャイン！ キャイン！」

その光景をみた他の二匹は恐れをなしたのか尻尾を巻いて逃げ帰っていった。

——これが俺の力『紅蓮の炎』だ。

「随分と長いトイレなのね、一稀」

「いや、すみませんホント。この通りでございます楓様」

戻ってきた俺を待ち構えていたのは悪鬼と化した楓だった。

おかしいなあ。俺、君たちを守ったんだよ？　それがどうして土下座しなきゃならんのか。だが、どうやらあの戦闘はバレていないらしい。心の中で安堵する。

それほど時間はかからなかったはずなのだが、どうも気に触ったらしい。楓からはどす黒いオーラが立ち上っているかのように見える。今にも憤怒の形相で罵倒されそうだ。

「あんたがいなかった時にモンスターに襲われたらどうすんのよ

！」

そらきた。

「その時はしょうがない。運が悪かったと思って諦めてくれ」

「——約束、してたはずよね」

だから俺その約束守ったんだって。と言いたいけど言ったら姿を隠した意味が無くなってしまふからそこは自重する。

「というか遥斗に守ってもらう、じゃダメなのか？」

「え？ い、いや、そういうことじゃないけど……よく分かんないけどダメ」

「なんでだよ」

本当意味分らないな。

「……はあ、なんか怒る気なくなっちゃった。さ、もう帰ろ？」

言つてすぐさま出口へ向かっていく。

相変わらずよく分からないやつだなあ。

俺も追いかけなきゃ。

「——ん？ 遥斗、なにやってんだ？」

「……なあ一稀、俺ってそんなに弱く見えるのかなあ……」

楓の「よく分かんないけどダメ」発言は遥斗の心に傷を負わせたようだ。

俺は同情の視線を送った後、みなかったことにして楓の後を追った。

辺りはすっかり夕暮れ時だ。

最初この森に入ったところに戻ってきた。どうやら遥斗の話は本当だったようだ。出口にでた俺は一度後ろを振り返り、その薄気味

悪い森の奥を覗く。やはり吸い込まれるような闇がただ広がるだけだ。

「おい、なにしてんだよ一稀。はやくこっちにこい」

少しばかり目を奪われていた俺は、遥斗の声で我に返った。見ると、楓と遥斗はもう傍にある茂みに身を移していた。

「あ、ああ。今行く」

もう少し見ていたいたい気もしたが、諦めて茂みに身を移す。

「……………見回り、いないか分かるか？」

あれから気を持ち直した遥斗が来るときと同じ真剣な顔をして尋ねてくる。

「……………いないみたいだな」

「ま、見つからないうちに速く柵を越えておかないとな。――  
――よし、行くぞ」

ふいに森の中にゴウツと風が突き抜けた。聞こえてきた轟音は、まるで森そのものがうなりをあげているようだ。

「何この音……………早くいこ、ほら」

楓に手を引かれる。それにつられて俺も走り出した。

荒地地まで戻ってきたところで遥斗から声がかかった。

「よし、ここまで来れば大丈夫だろ」

柵を越えてからも走っていた遥斗の歩調がゆっくりになる。

「ふうー、それにしてもあまりいいところじゃなかったわね」

当たり前だろう。

「そりやそうだ、あんな気味悪い場所をいいところだという人がいたら見てみたいもんだ」

あそこを気に入ってるなんて物好きはそうそう――

「気味悪いなんていうな！俺みたいな人種にとっては聖地巡礼のようなもんなんだよ！」

ここにいたか。

さっきの荒れ地とは天国と地獄の差がある華やかな居住区につき一息ついていると、ふいに楓が俺を凝視してきた。

「どうした？　なんか俺についてんのか？」

「いや、そうじゃないけど．．．．．。あんたの裾、なんかついてるわよ？」

楓の指したところを見ると、裾にさっきの戦闘で流れた俺の血がついていた。

「いや、これは泥だ」

誤魔化せるか．．．．．？

「ふーん。それにしても今日は汗かいたわ。帰ってシャワー浴びなきゃ」

誤魔化せたようだ。だが、俺の安心と裏腹に、楓の言葉に反応する変態が一人。

「シャ．．．．．シャワーだと！？」

「ほらそこ、興奮すんな」

俺が変態に指をさすと、自分の人差し指から少し血が流れていたことに気づいた。

「おい、一稀そこ血出てんじゃねえか！」

遙斗は大げさだなあ。きつとさっきの戦闘、あるいは小枝にでも引っかけたのだろう。

「え？　ちよつと大丈夫？　——　待ってて。私、絆創膏持ってるから」

楓が靴からごそごそと絆創膏を取り出す。

「いや、大丈夫だって」

こんなものかすり傷だ。

「そんなこと言わないの。ほら、手だして」

ここまでされているのに断るのも気が引けてきた。俺は渋々手を出す。

「——ん、もういいわよ」

「あ、ああ。ありがとな」

シンプルな絆創膏が貼られた指を凝視し、慣れない礼を述べる。顔で、よしと頷いた楓はまた先頭を歩いていく。その姿を眺めていると、遥斗が神妙な顔で話してきた。

「．．．．．なあ一稀。お前と岩倉が話してるとき、たまに妙な疎外感が生まれるんだよなあ」

「．．．．．気のせいじゃねーかな」

遥斗のぼやきを気にせず、俺も楓の後を追った。

見上げれば辺り一面夜空が目映っている。

周りに店がズラリと並べられている、いわゆる商店街に出た俺たちはそれぞれ帰路にっこうとしていた。

「じゃ、私はここだから。じゃあね、一稀、及川」

「じゃあな、楓」

「また明日なー、岩倉」

俺たちは各々別れの挨拶を言う。俺も早く帰って休みたい気分だ。きつと夏穂が夕食作って待ってるだろうし、早めに帰りたい。

「あ、明日の課題忘れんじゃないわよー」

姿が少し小さくなった楓から聞こえてくる声。

「だってよ、一稀」

「お、俺か、今のは。お前っていう可能性も」

俺じゃないと．．．．．願いたい。

「お前以外いねーっての。俺はいつも課題やってるし」  
「く．．．．．」

課題なんて大っキライだよチクショー！

「あ、俺もそろそろだね。じゃ、明日課題忘れんなよー」  
分かってるよ！

「．．．．もし、いや、もしね。万が一課題忘れちゃったときは頼むよ、遥斗くん」

「忘れる気満々だろ、お前！」

そ、そんなことないっす。

「じゃ、そういうことで！」

シュタツ！

俺は遥斗の言葉を聞くまいと走り帰った。

## Episode 4 (前書き)

今回は物語にはあまり関係ありません。けど一応やっというた方がいいのかな、と思ったので、書きました。

## Episode 4

「おかえりー、兄さん」

「おう、ただいまー」

家に帰ってダイニングに向かうドアを開けると、夕食のいい匂いと、夏穂が最近取り替えたばかりの木製ダイニングテーブルの椅子に座って待っていた。

「それにしても今日は遅かったね。どこ行ってたの？」

今日はゾーンに行ったんだ、なんて言えば心配されるところではなくなってしまうから誤魔化さなければ。

「あ、ああ。ちょっと遥斗とゲーセンに行ってた」

「んー、そっか。ほら、はやく座って座って」

夏穂の言うままに俺はダイニングの椅子に座った。

「いただきます」

俺に続き夏穂も、

「ん、いただきます」

今日の夕飯はカレーだった。それにしてもさすが夏穂だ。よくできてる。

「んー、やっぱりうまいなあ。そこらのファミレス以上の腕前だよ、夏穂は」

「お、おだてても何もでないって、兄さん」

おだてたわけじゃなく、本心からそう思っているんだけどな。

「そういえば、今日お前は何してたんだ？」

「今日はね、友達の家にお邪魔してた。まあ、帰ってきてからはゲームしたり、テレビ見てただけだね」

「へえ、そうか」

それから黙々と二人とも食べ続けるが、気まずい空気は流れていない。むしろ居心地のいい空気が流れている。やはり夕食の空気はこうでなくちゃ。

「あ、兄さん。これ食べ終わったら一緒にゲームしよう？」

夏穂がカレーにふうふうと息を吹きかけ、熱いのを冷まそうとしながら俺をゲームに誘ってきた。別に食べ終わってからは何の予定もなく暇だったのだ。どうせだから誘いに乗っておこう。

「やるよ。これから暇だし。——で、なんのゲームをするんだ？」

「それはね——」

それとはRPGだった。なんでも今日発売されたばかりの超人気商品だとか。このゲームは現実で実在するモンスターをそっくりそのまま持つてきたらしい。

この時代の技術では仮想アバターを用いて意識をゲームの中に入り込ませるまでのものが完成している。このゲームもその技術を使っているみたいだ。

夕食を食べ終え、食器を下げ終わった夏穂がゲーム本体をテレビに接続し、スイッチを入れる。すると前面のテレビモニターに、タイトル画面が映し出された。

『Blood of Last』

「なんつーか、グロそうな感じだなあ」

俺がタイトル画面を見た素直な感想を述べると、

「そんなじゃないよ。このゲームはね、政府が国民にモンスター  
の恐ろしさを知ってもらうために作ったゲームらしいの。だから  
すごいリアルに作ってるらしいよ？」

「ふーん。なんつーかシビアだな………よっこいし  
よつと」

そういいながら俺はソファに腰を下ろす。

「じゃ、兄さん。これがぶつて」

そういつて差し出されたのは被り物(?)みたいなやつで、これ  
をかぶってスイッチを入れれば意識がゲームの中に入るらしい。

かぶった俺はサイズがピッタリだったことに驚いた。

そのことに気がついたのか夏穂は口で説明してくれる。

「ふう、本当なら家族四人でやるはずだったんだから。兄さんの  
がピッタリなのは当たり前ってこと」

へえ、そうだったのか。てことはここにもし母さん、父さんがい  
たら一緒にやっていたのか。

「じゃ、スイッチ入れるね？」

俺は顔で頷く。

「三、二、一、はい！」

その瞬間、俺の意識はブラックアウトした。

「もほ………ここは………？」

目を開けると辺り一面草原だった。風がなびく音がとても心地よく、地面の感触がなぜか気持ちいい。ここまでリアルに作るとは恐ろしい限りだ。

「んーと、ちょっと待ってて」

いつの間にか隣に戦士顔で立っていた夏穂が手に持っているガイドブックを読む。

「この名前は……『草原』だって」

「そのまんまだな」

もうちょっとマシな名前は思いつかなかったのか。

「ん………？　ていうかどうして顔も身体もゲームの中なのに同じなんだ？」

今頃気づいたが、ゲーム中であるはずなのにリアルな身体とそっくりだ。

「それは私が全部セッティングしたんだよ。けっこう大変だったんだから」

へえ。それは感謝しなければ。

「えーと、『この草原には低レベルのモンスターが多数出現します。最初は初期装備ですが、倒したモンスターの素材を鍛冶屋に持って行けば上位の装備を作り出せます』だってさ」

初期装備………？　身体を見渡してみると、確かに腰に剣がささっている。他にどんなのがあるのかと頭上に浮かんでいるメニュー画面をタッチし、ステータスを表示させた。

レベル：5

装備　：『錆びた剣』

攻撃力：10

防御力：5

敏捷性：7

素早さ：7

命中率：8

回避率：10

知能：3

スキル：『索敵』

知能低すぎだろ。これってバカってことじゃないか。

自分のステータスに落胆した俺は、夏穂に「ま、まあ運が悪かったと思って、ね？」と慰められながらも森の中へと歩を進めた。

鬱蒼とした森の中を歩いていると、前方に粘着上の物体が現れた。《スライム》と頭上に表示されているのを見て、思わず「うわぁ」という声を漏らす。

見ていてネチャネチャしているのがとにかく気持ち悪い。

「なあ、アレどうすんの？」

とりあえず、夏穂に聞いてみる。

「とりあえず初心者の兄さんはとにかく斬って斬って斬りまくるのがいいんじゃない？」

生憎だが、リアルの方では初心者じゃないけど。

だが、刀を使って戦うのは初めてなので、アドバイス通りにしておく。

「はあ！　せいっ！　せいやっ！」

闇雲に振り回した刀は側面に二回、頭上から一回当たり、《スライム》はその姿を白い光と共に霧散させた。

「一回目にしてはすごいじゃない兄さん。……………といって

もアレ、レベル2なんだけどさ」

なんなんだろうなこの気持ち。嬉しいのか虚しいのかよく分からない。

「とりあえずここから一旦別行動にしよう。リアルに戻りたいときはメニューのログアウトボタン押したら戻れるから」

別行動か。とにかくレベルをあげることに専念しよう。

「ん、分かった。戻るときは一旦お前に声かけるわ」

「はい」

そこから俺はレベルアップのため、遭遇したスライムをひたすら狩り続けた。

経験値は微々ながらも着々と溜められていき、今ではレベル8だ。

知らぬ間に森の深いところまできていた俺は、スライム以外のモンスターが前方にいることに索敵スキルの能力で気がついた。

危ない危ない。いきなり急襲されたらゲームオーバーだったかもしれない。

茂みに身を隠してそのモンスターの名前を頭上のバーで確認する。

《レッドハウンド》

見た目は野生の犬で、その名の通り赤い体毛を持ち、今も飢えた獣のように獲物を鋭い目で探している。

……ってあれ？　なんかデジャヴなんですけど。

よし、一回記憶を振り返ってみよう。

―― 振り返り中 ――

ああ、そうだ！ 昼間、ゾーンに二人と探索しにいったとき、俺が倒したモンスターだ。

名前も知らないで倒しちゃったけど、アレ雑魚モンスターだったのか。

ま、リアルで倒せたのだから、ゲームの中でも問題ないだろう。俺は、所詮雑魚、と思いながら右手に力を込める。

こちらに気づいた《レッドハウンド》が昼間と同じように土を蹴って襲いかかる。

だが、もう遅い。こっちはすでに充電完了だ！

右手が瞬時に紅蓮の炎に包み込まれ――

―― るはずがなかった。

あ、やべ。ここゲームの中じゃん。

次の瞬間バウバウ吠えられながらボコボコにされ、薄れていく意識の中ゲームオーバーの血文字をみた気がした……………。

「うおわあああああ！」

ゲームオーバーになった俺はどうやら自動的にリアルへ戻ってきたようだった。

被っているものをソファアに置いて、精神を落ち着かせる。確か、バウバウ吠える犬にボコボコにされたんだっけ。・・・トラウマになりそうだ・・・。

見ると夏穂はソファアに頭を乗せながらまだゲームの世界に入っている。今頃どこかの強モンスターとでも戦っているのだろう。

「・・・・・・・・とりあえず緑茶でも飲もう」

今は頭を落ち着かせたい。そう思い、ダイニングに足を運ぶ。

冷蔵庫の中に保存してあったペットボトルを一気に飲み干す。

ゴクッ　ゴクッ

「ぷはあ！　あー、生き返った」

かつてない程の爽快感が身体を襲う。正直緑茶をここまで美味しいと思ったのは初めてだ。

さっぱりとした爽快感に浸っていると、横から声が聞こえてきた。

「ちよつと兄さん、なに死んでるのよ！」

いつの間にかこつちに戻ってきていたらしい。夏穂はソファの上に頭を乗せながら信じられないといった口調で物を言ってくる。

「お、戻ってきたのか夏穂」

「戻ってきたのか、じゃないわよ！ あんな森の雑魚モンスターなんかじゃ普通絶対死なないのに……」

それは違うんじゃないだろうか。実際、俺が死んでるわけだし。

「いやいや、違うんだって。あの森の奥にさ、レッドハウンドっていう強いモンスターが潜んでたんだって」

その名前を聞いた途端に顔を下に向け、呆れたような口調になった。

「……………レベル15以上になってから挑みましょうってガイドブックに書いてあったのみなかったの兄さん……………」

どうやら勝敗は最初から決まっていたようだ。

## **E p i s o d e 4 (後書き)**

次回からはこの物語の本筋に戻ります。

## Episodes (前書き)

ついにストーリーが進みました！

## Episode 5

### 次の日の放課後

「天江。俺はな、お前のためを思って言ってるんだ。宿題を出せ」  
現在、職員室で俺は目の前にいる『醤油』こと阿野勇作に説教という名の脅しをされている。題材は出していない課題のことだ。だが俺だってやっていないわけじゃない。

「いや、先生の教科はキッチンと出しているじゃないですか」

そう、この教師の出す課題だけは出している。じゃないと殺されてしまうからだ（精神的に）。

「俺が言ってるのは他の教科のことだ！ お前は何一つ出してないそうじゃないか」

事実ではある。基本的に俺は課題が面倒だからほとんどは未提出だ。教師陣も俺には諦めているらしい。

「確かにそうです。けどね、俺にだって譲れないものがあるんです」

そうさ、俺にも譲れないものがある。

「ほう……それはなんだ？」

醤油が腰掛けている椅子がギシ、と音を立てる。

まだか？ と言いたげな醤油に迫力を覚え、一瞬肩が震えて、言

葉を言うのを躊躇う。

「それは――」

頑張れ！ 俺！ 信念を貫き通すんだ！

「それは？」

醤油が繰り返して尋ねてくる。

「それは――」

さあ！ あと一息！

「ゲームのための時間です!」

職員室の空気が止まった瞬間だった。

ひどいめにあった。あれからというものの俺は別室に連れられ、今まで説教をくらっていた。なんなんだよ、正直に言っただけじゃないか。あそこまで怒ることもないだろうに。どうも説教の時間が長すぎて遥斗や楓はもう帰ってしまったようだ。今日はどうやら一人で帰ることになりそうだ。俺の足は教室で帰る準備をしたあと、玄関に向かう。

「……………ん? なんだこれ?」

靴箱を開けると、なにやら手紙が入っている。

これはもしか……………

淡い期待を胸に寄せつつ、シールが貼られている封をとる。

『今日の放課後、いつでもいいので屋上にきてくれませんか?  
待ってます』

天江一稀さんへ』

中にはそう書かれた便箋が一枚。ついに俺にも青春の予感がきたよ。

だが相手の名前がないのが少し気にかかるな。これで男性ってオチだったら嫌だよ俺。きつと焦ってて書き忘れてしまったんだろう。

そう思いたい。

いつでもいいと書いてあるのだ。せっかくだし、今行こうじゃないか。屋上でずっと待たせるのも悪い気がする。

俺は屋上に向かう自分の足が少し早足になっているのを感じた。

ギイツ

扉を開ける。緊張が高まってしょうがない。

開けた途端に風が目に入ってしまった、一瞬目を瞑る。

「あなたが……天江くん」

目を開くと、そこには今まで見た中でも群を抜く美少女が立っていた。

「初めまして」

「はあ」

改めて見てみる。黒髪のセミロング。整った顔立ち。豊満とまではいかなない少し控えめな胸。スラリと伸びている足。まさしく美少女だ。

「といっても隣のクラスだから初めましてじゃないかもね。もしかしたら一回会ってるかも」

って、えええええええええええ！　隣のクラス！？　こんな美少女クラスがいたなんて！　俺の目は節穴か……

「．．．．．その顔じゃあ私が同年だったっていうことも知らないみたいね．．．．．はあ」

俺はどれだけ隣のクラスを見ていなかったのだ。ここまで人の目を引く容姿をしているのに今まで気がつかなかったなんて。

「私の名前は岩崎奏。単刀直入に言うわ、私のチームに入って欲しいの」

は？

「あなたの能力のことは知ってるわ。ぜひそれを私たちのところで活用してほしいの」

な、なに？　なんでバレた？　この学校で平和な学生生活をするため口外したことは一度もないはずだ。

「．．．．．ど、どこで俺のことを知った？」

「うちのチームに入れたいと思ったのは昨日。善は急げってね」  
昨日といえば俺が森の中で能力を使った日だ。もしや監視してたのか？

「元々能力者の気配させてたから、いつかはこうやって誘ってたの。けど昨日のを見て、ね」

どうやら気配こそしなかったが、昨日のことは全部見られていたらしい。俺の能力のことも全部。

「そ、そうかよ。確かに俺はお前らの言うところの『能力』が使える。だが、えーと、岩崎さんとやら、お前はどんなんだ？　能力が使えるのか？」

「私？　ええ、使えるわよ」

．．．．．ここで使えないことを疑ってもしょうがない。ひとまずは信じることにしておこう。

岩崎は屋上のフェンスに寄りかかりながら説明を始めた。

「．．．．．この能力はね、世界革命の大惨事によって私たちの眠っていた才能が目覚めた結果なんだって」

岩崎がいった大惨事とは、『怪物の行進』のことだろう。あのことは鮮明に頭の中に残っているが、正直あまり思い出したくない。

「あるとき、家族を助けたい、生き延びたい、愛する人を失いたくない、それぞれがそう思ったはず。その思いに呼応するように生まれたのがこの能力らしいの」

．．．．．衝撃の展開だ。愛の告白ではなく、まさか自分の能力の起源を知ることになるとは。

「能力を手に入れた私たちは、次第に集まっていた。それが私たち『黒い絆』よ。といってもそれが総本部で、下に何個も組織が

あるんだけどね。私の入ってるチームもそのうちの一つよ。名前は『暁の彗星』」

「はは、やけに中二病っぽい名前だな」

こんな状況でも笑いがこみ上げてくる俺は可笑しいのだろうか。

「しょうがないじゃない。ウチの隊長がそういう人なんだから」

なんか興味わいてきた。今度会ってみたいな。だがそれは入隊と同義だ。少し頭を落着かせろ、俺。

「俺もホント何がなんだかよく分からないんだ。整理させるためにもとりあえず時間くれ。一日、一日でいいから」

岩崎はその返答を予想していたかのように自分の言葉を並べた。

「まあ、そりゃそうよ。確かにこんな話いきなりされてもね。本当に一日でいいの？」

「明日までにはキチンと決めておくから」

「……そう、分かった。明日放課後になったらクラスに迎えに行くことにするわ」

一人あの後寂しく家に帰宅した俺はベッドに突っ伏していた。

あの話はなんだったのだろうか。俺なんかをチームに入れて何がしたいのだろう。いろんな疑問が頭を取り巻く。

悩んだ末、俺の出した答えは――。

## Episode 6 (前書き)

今回はちょっと短いかもしれませんが。

## Episode 6

翌日

学校での授業はほとんど耳に入ってこなかった。  
代わりに考えていたのは、昨日の岩崎の話だ。

—— 単刀直入に言うわ、私たちのチームに入って欲しいの。

正直自分の中ではもう答えは決まっている。考え抜いて出したものだ。後悔はしない。

キーン コーン カーン コーン

最後の授業終了のチャイムが鳴り、生徒の雑談話がちらほらと聞こえるようになる。

「あんた、今日どうしたの？ なんかずーっとボケツとしてるし、俺にも周りと同じように楓から声がかかってきた。だが、他と違うのは心配そうな口調をしていることだ。」

「大丈夫だから。別に考え事してただけだし。ていうか心配されるほど俺の顔は呆けてたのか？」

自分としては確かに授業は聞いちゃいなかったが、受ける姿勢だけはとっていたはずだ。

「そりやあもう。横からみたら丸わかりよ。もうなんか心ここに  
あらずって感じだったわ」

客観的にみた今日の俺はひどいようだった。おかしいなあ、そこ  
まで顔に出してはいなかったはずだけど。

「おら、ホームルーム始めんぞー」

突如クラス全体に響いた声の主は、少し熱血が入っているウチの  
担任だった。辺りで雑談を交わしていた生徒が早々と席に着く。  
楓もまだ話しかかった様子だが、渋々という感じで席についた。

このホームルームが終わったらまた岩崎とご対面だ。今から心の  
準備をしておこう。

「起立！ 礼！ さよーなら！」

クラスに日直である山崎くんの野太い声が響いた。

さて、いよいよだ。昨日岩崎がクラスに迎えにくると言っていたが、  
掃除の邪魔になってしまってから廊下で待つことにしよう。

俺は鞆を持って、そそくさと教室を出る。

「ちょ、ちょっと待って」

教室を出て行く俺を慌てたように呼び止める楓。まったく、なんな  
んだよ。

「あの、疲れてるんだったら、気晴らしに街に出かけない？」

……俺のことを心配してくれてるのか。心で少し鬱陶し  
く思ったのを取り消す。日ごろの感謝も込めて、今度一緒に街に出

かけたときは駅前のケーバイキングでも奢ってやろう。

「今日はちよつと用があるんだ。ゴメンな」

「．．．．．そう。ま、まあ今度空いてる日があったら言うて！　いつでも付き合うから！」

そ、そこまで強く言わなくても。そういつて階段を下りていく楓は、俺の気のせいかもしれないが少し落ち込んでいるように見えた。

——まあ楓のおかげで緊張がほぐれた。ありがとな。

俺は心でそう思い、廊下の壁に身体を寄せる。もうそろそろ来るだろう。俺は気合いを入れるために、頬を——。

「おいっ、一稀！　これは．．．．．どういうことだあああああああああああああああああ！」

遥斗の怒声が廊下に轟いた。やかましいな、おい。今度はなんだよ。

「お前！　いつウチのクラスの岩崎さんと知り合いになったんだ！　お前のようなぐーたらゲーマーにあの方と接点があるとは思えない！　一体どんな魔法を使ったんだ！」

ぐーたらゲーマーとは失礼な。確かにゲーマーは否定しないが、ぐーたらは否定するぞ。そんな俺の心の叫びを無視して遥斗は一方的に話しを続ける。

「さつき、お前とは仲がいいのかって聞かれたんだ！　女子ランキング四位の岩崎奏にだぞ！　さあ、白状しろ！」

胸ぐらを揺すられながら答える。

「別に．．．．．なにもないって」

「嘘つけえ！！」

あー、うざりたい。確かに知り合いだといえばそうだが、昨日初めて会話した知り合いだぞ。それに知り合ったきつかけは常人には理解しがたいものだ。白状なんてできやしない。

俺がぐらんぐらん揺すられていると、問題の人物が隣のクラスからひよっこりと現れた。

「天江くん、遅くなってごめんね。今掃除が終わったとこだから  
ちょうどいいところに！ 助かった！

隣のクラスから出てきた岩崎はとことここちらに走ってくる。  
少し大人びた印象を持っていたので、なんていうかギャップがすこ  
い。

その姿を見た遥斗の手が緩む。抜け出すチャンスだったんだが、  
岩崎に目を奪われた俺の身体は思うように動かない。

「ほら、行くわよ」

岩崎がぐいぐいと俺の手を引っ張る。

「ちょ、待って」

俺は横目で後ろを振り返る。

そこには、信じられないものを見てしまった、というような顔を  
した遥斗が呆然と突っ立っていた。

ギッ

昨日と変わらずボロい音を出す屋上の扉を開いた。また風が目  
に入り、目を瞑る。ここはいつも風が強いな。

「さあて。あなたの答え、聞かせてもらっわよ」

岩崎がフェンスに寄りかかりながら言う。

「わかった」

頷いた俺は何故かたたずまいを直す。

「——チームに入らせてもらっよ」

これが、俺の答えだ。

その答えを聞いた岩崎は目を細める。

「後悔はしない？」

「これからさき、するつもりはないさ」

リスクがあつたとしても、それを十分凌駕するメリットがあると思う。

それに、俺はもしかしてこの転機を望んでいたのかもしれない。

その答えに満足した岩崎は一瞬目を瞑りコクと頷いた後、俺に笑顔をみせた。

「——ようこそ『暁の彗星』へ！　あなたを歓迎するわ！」



## Episode 7 (前書き)

夜中書いたからちょっと文章が見苦しくなってるかもしれませんが。

## Episode 7

夕暮れ時。

「ここは．．．．．?」

屋上で答えを出した俺がまず連れられたのは、部室棟の部屋の前だった。岩崎曰く、「まだ日も沈んでないから隊長が学校に残ってるの。せつかくだから会いに行きましょう」とのことだ。

昨日の会話でその『隊長』とやらは子供っぽいということが分かってる。．．．．俺は会ってからどういう反応をすればいいんだろう。

「ここは、平たくいうと私たち『暁の彗星』の本拠地よ。言っておくと、メンバーは全員この学校の生徒なの。集まるのが怪しまれないように名目上は一応部活になってるわ。名前は『彗星部』」

「彗星部!?!」

俺は素っ頓狂な声をあげた。メンバーが全員この学校の生徒ってことにも驚いたが、彗星部ってなんだよ!

「『地域住民、生徒が困っているとき、彗星の如く参上し、救いの手を差しのべる。』これが私たちの部活動よ。略して彗星部」

「う、うさくさすぎる．．．．．」

あまりに謎すぎるだろ。正直これで部活の申請が通るとはとても思えない。

「よく部活申請が通ったな」

「私たちは悪くいえば政府の手先だもの。学校のお偉いさんは黙認してるってこと」

学校に圧力加えたってことか! 何気にすごいな、彗星部!

俺はここに来るまで疑問だったことを口にすることにした。

「そういえば隊長ってどんな人なんだ?」

岩崎はどうやって答えればいいか考え込んでいる。

「んーとね、一言で言っちゃえば、マイペースな人ね」

マイペースな人なのか。この壁一つ超えたところにいる隊長とやらにますます興味がわいてきた。

「なんか興味わいてきた」

「ん。じゃあなんだし、もう開けるわね」

．．．．．ついに『隊長』に会うのか。緊張するなあ。

ガチャン

岩崎が木製の扉を開ける。

瞬間、俺の目に映ってきたのは――

――椅子に座りながら、無邪気にマンガを読む子供と、その隅でパソコン作業に没頭している大人びた女性だった。

小さい子供の方は、赤髪のポニーテール。前髪のかかった大きい猫のような目。マンガが面白かったのか無邪気に笑みを浮かべる口。中学生のような体型。

絶句する俺は、いつも通りといった表情の岩崎に疑問をいった。

「ここは．．．．．中学校じゃないぞ！」

岩崎はこちらに顔を振り向かず、言い慣れた感のある台詞をいう。

「あの子は真正正銘の高校二年生よ」

驚きの新事実！ 先輩だったのかよ！

「嘘つけっ！ あれ絶対高校生じゃないだろ」

「失礼なっ！」

俺が見たままの感想を述べると、批判の声がとんできた。

「まったく．．．．．カナ、そいつが今日連れてくるって言うてたやつかー？」

案の定、声も子供っぽいな。

「うん、そうよ」

カナ、とは恐らく岩崎のことを指しているのだろう。奏だからカナ、か。今度これだからかってやろうかな。

「アタシは二年の水野明梨。アタシのことは皆隊長って呼んでるからそれでいいよ。お前は、天江一稀だっけ？ カナ、合ってる？」

いや、せめて引き込む人材の名前くらいキチンと覚えておこうよ。

「あってるわよ隊長」

楓がそう返す。

「うむ、お前の名前は今度から『ツキ』って呼ぶから」

．．．．．。俺は声を出せずに横の岩崎を見る。

「誰にでもこんな感じだから」

それに気づいたのか、岩崎は小さい声で俺に教えてくれた。その間にも隊長の話は続く。

「まあカナが見込んだんだ、今更チームに入るのを拒みはしないよ。てことでこれ書いてくれたら話が早い」

そういつてゴソゴソと大きい机の引き出しの中から出したのは入部届だった。

「これは入隊の意思表示みたいなものよ。あんまり意味ないんだけどね」

俺は岩崎の説明を受け、とりあえずサインする。

ここまで喋ってないが、そろそろ聞きたいことがあった。

「隊長さん。本当のところ、ここの活動内容ってなに？」

隊長は目をパチクリとしている。まだ教えられてなかったのかと言いたそうだ。

「まだカナから言われてなかったの？ まあいいや。ここがやるのはモンスター討伐とか。他にもいろいろやるけど基本的にはそれがメインだよ。少ないメンバーも今日はたまたまそっちに行っちゃってるし」

「隊長は向かわなくていいの？」

「アタシ？ アタシは隊長だからな！ それは問題ナッシングだよツッキー」

なんかまた俺のあだ名変わってるし。それに向かわない理由が隊長失格だろ。

そう思っていると、パソコン作業に没頭してた女性が初めて声をあげた。

「今日はゲームをするために休んでるんですよ隊長ったら。初めてまして、私は同じく二年の渡来<sup>わたらい</sup>莉桜<sup>りお</sup>です。彗星部の主に会計をしています。以後お見知りおきを」

ずっと部屋に入ってから何も言わなかったんで、てっきり無口な人かと思っていた。だが、どうもそういうことではないらしい。

「ど、どうも。初めまして、天江一稀です」

こちらの女性は見るからにしつかり者だ。黒髪と眼鏡が異様に似合っている女性で、印象的には清楚な感じを受けた。……隣の中学生のような隊長と同年とは到底思えない。

「はい、もうこの件は終わり！ カナ、昨日のゲームの続きしようよ」

え、もう終わり？ 早くないっすか？ 呼ばれた岩崎は「はいはい」とため息をつきながらも部屋の隅にあるテレビに向かった。

「ちょ、隊長、俺の件もう終わり？」

「うん、そうだよ。だって話すこともうないじゃん。入部届は書

いてくれたんだし、かといって今からじゃもうモンスター討伐は時間が遅い。てことで細かいことと、自己紹介は皆集まる明日にするよ。ほら、ツッキーも一緒にゲームやる？」

こっちまで駆け寄ってきた隊長に腕を掴まれ、無理矢理テレビの前の椅子に座らせられた。別に呼んでくれれば行くっての。

テレビに映し出されたタイトル画面を見て俺は思い出す。

# 『Blood of Last』

「お、これ、俺も持ってるゲームだ」

これは、妹と一緒に一昨日やったゲームだ。今でもあのトラウマは心に残ってるぞ。

「これね、『黒い絆』に所属してるチーム全部に配られたゲームよ。何故かウチの隊長がハマってしまったわけ」

岩崎が説明してくれる。こんなゲームになんでハマったんだろうな。政府も政府だよ。ゲームに予算かけるんだったら俺の家の前にある壊れかけた街灯取り替えるっての。

「ツッキーも持ってたのか！ ならツッキーも入れて三人でプレイしよう！」

いつのまにか俺もゲームすることになってた！ たしか

にマイペースだなこの人！ 周りの人間を自分のペースに呑ませる天才だよ！

かくして俺は入隊初日から何故かゲームをして遊んだのであった。  
.....。

「ああー、疲れた」

学校を出ると、すっかりもう夜だ。あれからゲームの中にダイブし続けた俺たちは、時間がたつのを忘れて楽しんだ。俺にはめでたいことに新しくトラウマができてしまったんだけどね。

「確かに疲れたわね。けど明日からはもっと疲れるわよ？」

一緒に学校をでた岩崎と、途中まで一緒に帰る。よし、少しからかってみよう。

「まだ体験してないから分かんないなあ、カナちゃん」

苦笑混じりにさっきまで隊長が呼んでたあだ名でからかってみる。どんな反応を見せるかな。

「ちゃん付けはやめてよ。他のメンバーは、奏って呼んでるんだけどな。まあ、カナならいいわよ？」

ふむ、正直どっちでもいいんだけど。まあどうせならカナのままでいいや。

「じゃあ俺、カナって呼ぶことにするわ、お前のこと。その代わり俺のことツッキーって呼んでくれてもいいぞ？」

「いや、それは遠慮しとく。．．．．．まあ、カナって呼ばれるんだったら私はあなたのこと一稀って呼ぶわ」

なんだか互いに変な意地を張ってしまったようだ。．．．．．つと、もう家のすぐ近くまでできてしまった。時間が経つのは早いもんだな。

「はあ。じゃあ俺、家こつちだから。．．．．．じゃあな、そしてこれからよろしく、カナ」

明日から俺はこいつの世話になっていくんだろう。

親しみの感情を込めて、俺はカナと呼んだ。恐らくこれからもその呼び方は変わらないのだろうな。

——カナは、クスリと笑ったかと思うと、こちらに手を差し出し握手を求めてきた。

「こちらこそ。これからもよろしくね、一稀」

俺は慣れない握手をして、彼女にしっかりと頷いた。

「——ああ」

## Episode 8

「ふうー、よく皆真剣に授業を受けれるもんだ」

隊長と会った次の日、俺はいつも通り愚痴を漏らしながら授業を受けていた。

「そりゃあ期末テストが近付いてきてるからでしょ。誰だって夏休みを補習で埋めたくないしね」

隣の席の楓が、理由を教えてくれる。期末テストが近いのは確かだ。俺もそろそろやらなきゃヤバイかも。

「あんたも今のうちにやつかないとテストやばいかもよ。それとも鬼の補習を好きこのんで受けたいわけ？」

「んなわけあるか。俺のことはほっとけつての」

あの鬼教師の補習など恐ろしくて想像したくない。

それよりも、連日あったことを昨日頭の中で整理してたからかなり眠い。

「まあいいや。今日は寝不足なんだ。放課後起こしてくれ。おやすみ」

「あんたねえ。今の私の話聞いてた？　．．．．．ってもう寝てるし」

呆れながら嘆息している楓の姿が意識の落ちそうな俺の目に映った。

もう・・・・・・・・無理だ・・・・・・・・

俺は襲いかかる眠気に身を任せた。

放課後になり、誰もいなくなった教室の中、二つの声が聞こえてきた。

「・・・・・・・・ちよつと一稀。起きて、もう放課後よ」

「岩倉。俺に任せてくれ。いい方法があるんだ。一発で起きるさ。・・・・・・・・それに昨日のこと、全部聞かせてもらわなくちゃなあ」  
誰かがなにか話してる。

「じゃあ一回やってみて」

「うむ。俺の一撃必殺技、くらえ！」

なんだ？ 今話してるのは遥斗と楓か？ つーか今聞こえた一撃必殺ってなんだ？

俺の困惑状態が続いている中、遥斗は大きく息を吸いこんだ。

「な、なんだアレは！？ あそこに落ちているのは・・・・・・・・  
エロ本！？ 一稀、起きろ！ 一大事だ！ エロ本があそこに転が  
ってるぞ！ さあ一緒に取りに行こう！」

マジで！？ っってお前はアホか。

目を開けると、鳩尾をやられたらしい変態が床に横たわっていた。

どうやら自分の身が一大事になってしまったらしい。

「だ、大丈夫か!？」

「う．．．一稀、逃げる．．．お前の後ろに鬼が．．．．．ごはっ!」

瞬時、俺の頬を掠めた渾身のストレートが遥斗の腹にヒットした。

「は．．．．．遥斗おおおおおおおおおおおおおおお  
!」

見るも無惨な変態は、しばらく痙攣したあと動かなくなってしまった。

「まったく．．．．．変なこというからよ」

「お、お前がやったのか楓」

「大丈夫、それほどしてないから」

それほどって．．．泡吹いてんだけど。

「別にエロ本くらいで．．．．．惨すぎる」

遥斗の英霊に．．．．．追悼!

楓は怒らせないようにしよう。これをみたらそう思ってしまった。

楓との会話にはもっと気を遣おうと俺が思っていた頃、突然扉が開いた。

「あのー．．．．．一稀はいますか？」

声の主はカナだった。きつと今日も迎えに来てくれたのだろう。

今の俺にとっては天使様だ。

「か、カナ．．．．．」

その横で楓は何か考え込んでいる。

「あの人．．．．．確か隣のクラスの．．．．．岩崎さん．

．ねえ、あんた岩崎さんとどういう関係なの？」

俺に聞かれても。うーん、悩むところだ。チームの仲間? いや、

楓には通じない。

俺がうなっていると、カナが横から割って入ってきて答えてくれ

た。

「一稀とは一昨日知り合ったばかり。ただそれだけ。それ以上でもそれ以下でもないわ」

すっぱりと言いつける力ナ。確かにそれだけだけど、もっと重大な部分が抜けてるだろ。

「うそっ！　じゃあなんで呼び捨てなのよ！」

何故ムキになる。．．．相変わらず謎だなあ。

「それは．．．．．成り行き上？　．．．一稀、隊長を待たせてるから行かないと」

小声で最後の言葉を付け足してきた。そうか、隊長を待たせちゃってるのか。急ごう。

「楓！。俺ちよつとこの後用事あるから。それじゃっ！」

このままだと面倒なことになりそうだ。俺は返事を聞かないまま、鞆を持って教室をでる。

「ちよつと！　ちゃんとしたワケ聞かせてよ！」

教室から聞こえてくる楓の声を無視して、俺は一心不乱に彗星部へ走った。

「よお。遅かったな、新入部員」

部室の扉を開けた俺を待っていたのは昨日の二人を入れて、五人

のメンバーだった。

隊長は以前と同じ椅子に座りながらお菓子を食っていて、渡来さんはパソコンに向かい合っている。

他の三人は見かけたことのない顔だ。

俺に話しかけた男は茶色のさっぱりとした髪型で、タンクトップを着て週刊誌を読んでいた。

後の二人は女性で、一人は隅にあるベッドで、すうすうと寝ている。髪は肩までしかかからない長さの白色で、印象でいうと可愛いを形にしたような存在だ。

もう一人は地毛が分らないが金髪でかなりの美少女。して何故か分からないがメイド服。背は他の女性と同じくらいで、お茶を入れる姿が様になっている。

「…………カオスだ」

俺は率直な感想を述べた。だってこの部室、端から見たら絶対力オスだよ。

…………これから俺もカオスの一部となるのか。なんか複雑な気分。

「確かにそうだけど口にしちゃダメ。みんなー、連れてきたわよ」

全員に声をかける。

「自己紹介、自己紹介」

カナが俺に小声で言いながら肘でつついてくる。けど自己紹介って何を言えがいいんだろう。

「天江一稀です。好きな物はゲーム。嫌いなものは学校の課題です。よろしく願います」

とりあえず自分の名前、好きな物と嫌いな物を言ってみた。他になにを言えがいいんだろう。自分の能力のこととか？

そう思っていると、他の人物からも自己紹介の声があがってきた。

「俺は一年の井上大河だ。好きなものは隊長。嫌いなものは特にないな」

好きなものが隊長ってなんだよ！　ロリコンか！？　お前はロリコンなのか！？

だが、皆それがいつもの光景といった風だ。．．俺がおかしいのか？　否、そんなはずない。

俺が一人戸惑ってる中、自己紹介は続いていく。

「私は二年の逢原瑞月あいはらみづきです。見てのとおりメイドをしています。好きな物はお茶。嫌いな物はありません」

淡々といった口調。ていいうかなぜメイド？　普通お偉いさんの屋敷とかに住んでるものじゃないの？

「わたしは一年の稲村結衣です。好きなことは寝ることです。これからよろしく願いますー」

次に自己紹介したのはさつきソファで寝ていた子だ。ぺこ、と頭を下げてくる。．．なんていうか庇護欲をそえられる子だなあ。

「アタシ達のことは知ってるから別にいいとして。自己紹介も終わったんだし、今日の予定は新人研修も兼ねてちよつとしたモンスタ―討伐に向かってもらおうかな」

自己紹介が終わったとたんに隊長から指令が下された。入隊二日目にして討伐か。もつとなんか訓練とかあるのかと思ってた。

「イノちゃん！　結衣ちゃん！　君たち二人にはツッキーと一緒に向かってもらう！」

「はい、隊長！」

「むにやむにや．．まだ眠気がとれないよう．．」

イノちゃんて。俺のツッキーと似たり寄ったりだな。

二人の反応はそれぞれだ。井上なんかは敬礼していて、稲村は目をこすりつつも頷いてくれている。どうやら同行してくれるようだ。

「じゃあねえ、今回はこれに行ってもらおうかな。《メタルベア 一体討伐》ツッキーも頑張ってねー」

モンスター討伐初めてだというのに頑張れというんですか。さすがに無茶ですって。

みると、タンクトップだった井上はすでに上着を着て準備を整えていた。稲村も眠そうな目で、準備を整えている。

「はい、認証完了！ いつでもいつてらっしゃーい」

ニヤニヤと何故か隊長は笑っている。よく分からないなあ。

「一稀、頑張ってきてね。隊長とゲームして待ってるから」

「まあ、努力はするけどさ……」

笑顔で見送ってくれるカナに頷く。

「天江。このドアの前で待ってる」

井上に言われて部屋の隅に置かれている少し古ぼけたドアの前に立った。いったいこれは何なのだろう？

そう首をかしげていると、近くにいた逢原が教えてくれた。

「これは俗に言う『瞬間移動装置』です。ドアを開けた先には指定された空間が広がっています。転移できるのはモンスターがいる地域だけです」

す、すごい！　そこまで科学が進歩していたとは！

「それにしても……世界にこんな未知の利器があるとは」

かなり驚いた。実際普通に暮らしていたら存在すら知らなかっただろう。

「よし、準備が整った。お前は準備できたか？」

井上の準備ができたようだ。肉食系男子が見事に完成されている。

「いや、元々準備なんてしてるようなものだし」

「稲村は？」

「できたよー」

どうやら稲村も準備が終わったようだ。

三人並んでドアの前に立つ。

「よし、行くぞー！」

井上がかけ声と同時にドアノブをまわした。ドアの内部は水面上

に光で覆われている。

慣れた感じに二人がドアの内部に飛び込む。

二人が飛び込み姿が見えなくなったところ、一人深呼吸をして俺も光の中へダイブした。

## Episode 9

う．．．ここは．．．．．どこだ？

ドアに飛び込んだ俺は、どうやらそのまま意識を失っていたらしい。

「お目覚めか？ 天江」

頭上から声がふってきた。見上げると井上が俺を立っている。いったいここは．．．．．？

木々で覆われた視界。印象でいうと、密林だ。視界が鬱蒼とした植物に隠されている。

「ここは有り体にいうとゾーンの中の森だ。お前が立ち入った場所より深いところにいる」

あの森をまっすぐ行くとここになるのか。といっても不気味なのは以前と変わらずだ。できればもう来たくなかったんだけどなあ。

「おーい。天江が起きたぞー」

小走りで稲村がこっちにくる。走り方可愛いな。どうやら今回のターゲットである《メタルベア》を探していたようだ。

「あっちには見た感じいなかったよ」

「そうか。じゃあ次こっちだな」

そういつて井上は稲村が走ってきた方向とは逆方向へどんどん歩いて行く。ちょ、速いつて。

「天江くん、行こ？」

愛くるしい声で、今だ立ち上がっていなかった俺に手を差し伸べてきた。なんていい子なんや．．．．．

俺は目尻に涙を浮かばせながら稲村の手をとり、井上を追いかけた。

よく分らないが、三十分は歩いたか。そんなときだった。

「——静かに」

井上の声がさつきとは違い真剣なものになる。

その真意を聞けないうちに俺は井上と稲村に茂みへと引っ張られた。

いったいなにが………

ぶつけた尻をさすりながら状況確認。

「なんかあったのか？」

井上が「あれを見る」と指をさしている方向を見してみる。

………。

そこには灰色の毛並みをしてる人の二倍はありそうな熊が仁王立ちしていた。

………おつかねえ、威圧感ハンパないわ、あの熊さん。

「あれが《メタルベア》だ。ていうか絶対大きな声出すなよ。それといつでも戦闘できる状態にしとけ」

俺は言葉に従い、右手に力を込めた。………よし、準備完了だ。

「天江はここに残ってくれ。つつか残れ。お前を戦わせたら俺が怒られちまう。お前のせいで隊長に嫌われるのは絶対御免だ」

まあ、妥当な判断だろうな。討伐一回目の俺はお荷物にしかなら

ないし。・最後の理由がちょっと引つかるけど、気にしない  
でおう。

「おい、結衣。準備もうできたか？」

「うん、できたよー」

稲村には緊張の色がみられない。場慣れしているのか、抜けた性格なだけなのか。

「じゃ、いつてくる。絶対手だすんじゃないぞ」

「いつてくるね、天江くん」

稲村が手に持つてるのは……短剣？

「あ、が、がんばってください」

思わず敬語になってしまった。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

駆けだした俺たちを待ち構えていたようにメタルベアは咆吼した。

「結衣！ 剣くれ！」

「うん！」

これでも命をかける戦いだ。必然的に俺も結衣も声が大きくなる。結衣がいつも忍ばせているもう一本の短剣を走りながら受け取る。俺はその短剣に電気を走らせた。

これは俺の能力の一部だ。体力が続く限り電気を操ることができる。

メタルベアが仁王立ちでこちらの様子を伺っている。今がチャンスだ！

「あつち」

ガキン！

剣の鈍い音が辺りに響いた。

くそっ、やっぱり皮膚が硬い。一回戦ったことがあるがやはり剣では無理か。ならこれでどうだ！

「結衣！ 後ろに下がれ！」

結衣に距離をとるよう伝え、自分も距離をとる。

メタルベアの爪の間合いに入らないところまでいき、手の中に電気を集束させる。

次第に俺の手から電流が漏れ始める。

だが、相手も察知してかその凶器ともいえる爪を振り回しながらこちらに突進してきた。

「ふっ！」

瞬時、図体の割に俊敏だった動きが鈍くなった。

結衣がメタルベアの足に剣を投擲したのだ。この機を見逃すわけにはいかない。

俺はよろけたメタルベアの元へ駆けだし、電撃に包まれた拳を繰り出した。

「らあっ！」

放った拳は相手の腹に当たった。巨熊の腹が赤く焼き切れ、地面に倒れる。

「はあ、はあ・・・」

元々こいつは天江を同行させてでも倒せるようなレベルだ。俺たちにとってはそんなに強くない。だからこそこんなに短時間で決着がついた。これくらいは当たり前前ってもんだ。

手で額の汗を拭う。して、俺は結衣に怪我をしてないか聞くため後ろを向いた。

「結衣。どこか怪我して——」

このとき、俺はどうやら慢心していたようだ。

「井上くん！ 後ろ！」

つんざくような悲鳴が耳を突き抜けた。瞬時に後ろへ振り向く。

[illegible]

耳を塞ぎたくなくなるほどの咆吼が森中に響き渡った。

とどめをさせてなかったのか！　ちくしょう！

だが、メタルベアは俺へではなく、別の場所へ突進していく。

その方向は——天江！

くそっ！

俺は取り返しのつかないことになる前に、持てる全力の力で熊のもとへ駆けだした。

二人の戦いが終わったようだ。恐ろしい熊さんだった。

いや、それにしてもすごかったな。たった数分の戦闘だったが、やっぱり次元が違う。後で「お勤めご苦労様です！」とか言つて差し入れても渡そうかな。

俺が戦鬪が終わったことに喜んでいると、

[illegible]

とてつもない咆吼が耳に聞こえてきた。

え？  
なに？  
熊まだ生きてんの？

よろけながらも立ち上がった熊が最後の力を振り絞ったのか知らないがこっちにもものすごい速さで突進してくる！

今度は仁王立ちじゃないぶん速度が上がってるようだ。

あの二人も突然のことだったらしく、助けはこないと見た方が良さそうだな。

ちよ、どうやってこの状況を打破すればいいんだ？

そんなことを思っている間にも熊はすごい速さで近付いてくる。

俺は瞬間決意した。

こうなったらもう迎え撃つしかない！

戦えるようにと最初に準備していたことに救われた！

俺の生命の危機でも感じたんだろうか。右手から甚大じゃない量の炎が溢れる。

もう時間がない！  
急いで紅蓮に包まれた右拳を繰り出した！

「らあ ああああ！！」

繰り出した右拳は熊の顔面をとらえた。

瞬時、熊の全身が炎に包まれ、燃え盛ったまま地面へ倒れ込む。

$$\begin{matrix} \neg \\ \wedge \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ ? \\ \neg \end{matrix}$$

あれ？ 俺が倒した・・・？

視界を覆っていた熊が倒れ込み、広くなった視界で困惑している俺が見たのは、遠くで啞然とした表情を浮かべる井上と稲村の姿だった。

## Episode 10

「すまん！ 許してくれ！ この通り！」

巨熊の黒焦げな死体が転がってる横、呆然とした俺にとんできたのは土下座だった。

井上はガンガンと頭を地面に打ちつけながら、

「危険な目に遭わせちまった！ ホント許してくれ！」

「いや、大丈夫だって。俺キチンと五体満足だし。別になんともないから顔あげてくれ」

「．．．．．そうか．．．」

まだ納得していないようだが、渋々と顔を上げてくれる。

「ごめん、ね．．．．．えぐっ、ひぐっ、天江くん．．．」

稲村．．．．．泣かないでも大丈夫だから。別に怪我してるってわけじゃないよ。

服で目をこすっているが、それでもどんどん涙がこぼれ落ちていく。なんかシリアスな展開に．．．．．

「と、とにかく大丈夫だから。それよりこの死体どうすんの？ 放置？」

「ああ。それはこれに認証させればいいんだ」

元通りの対応を見せる井上。ふう、一安心だ。

見ると服の中から何やらカードみたいのを取りだしていた。

「なにそれ？」

「このカードをこの死体にかざすと、黒絆本部が討伐ミッションの完了を認証してくれる」

「コクバン？」

「『黒い絆』の略称。．．．．．お、認証完了だ」

ピピツと音がしたと思うと、

『《メタルベア一体討伐》認証完了しました』

機械音が聞こえた。

「よし、もう帰ろう．．．．．はあ、隊長に今日のこと報告しなくちゃいけないーのか．．．失態だ．．．」

珍しく井上の落ち込んだ声。慰めると逆効果みたいだからやめておこう。とぼとぼと肩を落しながら歩いて行く。

「ほら．．．．．稲村も。泣かないで．．．な？」

「生きててよかった．．．本当．．．本当に．．．．．」

嗚咽を漏らしながら俺の差し出した手に捕まる稲村。来たときは正反対だな。

それにしても．．．．．俺の能力はどうしたんだろう。あそこまで炎が大きくなったのも初めてだ。

この能力は本当になんのだろう。

「おい、早くこいよー」

気の抜けた声で歩いている井上が俺たちを呼んでいる。俺は稲村の手を握ってその後を追いかけた。

来たときは気がつかなかったが、移動装置——ドアは近くに固定されていたようだ。盗難防止のため、見た目よりも頑丈らしくてモンスターの一撃などではびくともしない。それに、ドアを開けるのも指紋認証がかかっている。どこで手に入れたんだか俺の指紋も何故か登録されていたようだ。様々な疑問を頭の中に残して帰ってきた俺たち（主に井上）はカナとゲームをしていた隊長に今回のことを話した。

「大変だったんだね。まあツッキーも別に大怪我してるってわけ

でもないんだから、今回はカナの見る目が正しかったってことで」  
「分かりました。．．．それにしても一撃でメタルベア倒すってお前何者なんだよ」

「俺に聞かれても．．．．．」

答えようがないっての。自分だってさっきのには驚いてるんだから。

「それ本当？」

訝しげにカナが俺に聞いてきた。

「たぶん本当」

なんて答えるか迷ったが一撃で倒したのは事実。

カナは目をパチクリとさせて驚いたかと思うと、今度は真剣な表情で隊長の耳に顔を寄せて、

「隊長．．．．．これって．．．」

「うん、調査してみる」

小声でなにやら話している。

「おーい、なに話してんの？」

「な、なな、なんでもないよツッキー」

おい、目が泳いでるぞ。その隣でカナも「うんうん」と頷いているが不自然すぎる。絶対なんか隠してるな。まあ話したくないなら別にいいんだけど。

隊長が話題を変えようと突如思い出したように、

「あ、忘れてたけどツッキー上履きで行っちゃったでしょ。はいこれ替えの上履きと討伐用の靴。討伐用の方はあそこのロッカーに入れといていいから」

そういえば。みると靴が土まみれだ。これはもう使い物にならないぞうだ。厚意を素直に受け取っておこう。俺は二足の靴を受け取って片方の靴をロッカーに放り込んだ。

「じゃ、俺疲れたからもう帰りますんで」

すっかり日は沈んでいる。夏穂が夕食を作って待っている頃だ。俺は軽く会釈をしたあと彗星部を後にした。

校門をでた後、後ろから声がかかってきた。立ち止まる。

「待って、ちょっと待ってって、一稀」

「カナ．．．．．なんか用？」

「ちよつと心配になつちやうて。あの部室から帰る準備して走って追いかけてきたんだから」

その割には息一つ乱れた様子がないんだけど。そう思いながら俺はまた歩き出す。

「メタルベアのこと、本当に大丈夫だった？」

カナも俺の隣につき、二人で歩き出す。

「大丈夫だから。どこも怪我してないし」

「あの熊はね、私たちから見ると弱いけど討伐一回目の一稀が倒せるものじゃないの。ねえ、一稀あなた本当に何者？」

「その言い回しは俺が化け物と言ってるように聞こえるんですけど．．．．．」

「討伐初めてでこれは化け物よ」

俺、普通の人間だって。モンスターと同じにしてもらっちゃたまらん。

「ところでさ、期末テストに向けて対策とかしてる？」

話題変えよう。

「え？ まあ対策って言えないけど毎日勉強してるわよ？」

「じゃあさ、数学の――」

そこから別れ道までたわいもない雑談やら、学校であつたことを話した。

「じゃあな、俺こつちだから」

「またあした、学校でね」

お互い手を振りながら別れた。

別れてから自分の家につくまで考える。

俺の能力っていったいなんなんだ？

普通初心者では倒せないと言われたメタルベアを一撃で倒し、部員の面々を驚かせた俺の能力。考えれば考えるほど謎だ。

「俺の能力はどこか特別なのか？」

夜空を見上げて問いかけてみる。当然答えは返ってこない。

．．．．．はあ。一旦このことは忘れよう。

俺はため息をつきながら家に帰った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9177z/>

---

World Revolution!

2012年1月10日16時48分発行